順天堂大学客員教授
日本医史学会理事長

故 小川鼎三先生葬儀告別式記事

日　時　昭和五十九月五月十三日　午後一時
場　所　東京都青山葬儀所

葬儀次第

（参列者入場）
導師入場
開式の辞　大塚恭男
読　経
病歴報告　北村和夫
弔　辞
弔電披露
指名焼香　宮崎寛明、大塚恭男、小川東洋（喪主）
小川文代（御令室）、藪陸奥子（御令嬢）
荒井真理子（御令嬢）、有山登、弔辞奉呈者
参列者焼香
導師退場
葬儀委員長挨拶　宮崎寛明
閉式の辞　大塚恭男

一般告別式

故 小川鼎三先生略歴

明治三四年四月一四日生　井坂豊俊の三男として大分県杵築市に生る
大正一五年　三月　東京帝国大学医学部医学科卒業
同　一五年　四月　東北帝国大学助手
昭和　三年　五月　東北帝国大学助教授
同　一四年　三月　東京帝国大学助教授
同　一九年　四月　東京帝国大学教授
同　二一年　八月　日本解剖学会理事長　三三年まで
同　二六年　五月　日本学士院賞授与
同　三三年　六月　東京大学医学部脳研究施設長　三七年三月まで
同　三五年　五月　日本医史学会理事長
同　三七年　三月　東京大学教授停年退職
同　三七年　四月　順天堂大学教授（医史学）　四四年三月まで
同　三七年　五月　東京大学名誉教授
同　三七年　九月　日本学術会議脳研究連絡委員長
同　四一年　八月　大学設置審議会専門委員（文部省）
同　四一年一一月　日本学士院会員
同　四四年　四月　順天堂大学客員教授
同　四四年一二月　臓器移植に関する懇談会委員（厚生省）
同　四七年　四月　勲二等瑞宝章
同　四七年　七月　東京都神経科学総合研究所所長　五一年六月まで

同　五九年四月二九日没　享年満八三歳

御遺族　令室　小川文代殿　東京都練馬区貫井一―四七―八
令息　小川東洋殿

弔　辞

本日、ここに東京青山葬儀所において、本学客員教授、順天堂史編纂室長、順天堂医学編集委員長、日本学士院会員、故小川鼎三先生の御葬儀が順天堂大学並びに日本医史学会の合同葬をもって厳かに執り行われるにあたり、順天堂を代表して謹んで御霊前に追悼のことばを捧げます。

小川鼎三先生は、昭和十九年四月十日、順天堂医学専門学校が開校した第一日目、その第一時限の解剖学の授業を担当されましたが、それ以来今日まで、順天堂大学の教育に深い御理解と御助力を寄せられました。戦時中、また戦争直後の混乱の中での先生の講義は、順天堂で学んだ若い学徒に深い感銘を与え、無言のうちに学問とはいかなるものであるかを教えて下さいました。それは学生にとって砂漠の中で出会った泉のようなかけがえのないものでありました。

昭和三十七年の春、東京大学を定年退官されると同時に本学の専任教授に迎えられ、解剖学という住みなれた専門分野から新しく医史学という分野に変られて教育を担当し、併せて順天堂史編纂室長として順天堂史の編纂に当られました。佐藤泰然・尚中・進・達次郎と受け継がれた順天堂医学の歩みこそ、日本における近代西洋医学の歩みそのものである、との御理解に立たれた先生は「順天堂医学」の編集委員長としても昭和三十九年以降今日まで、長年に亘りご指導下さいました。先生の篤実重厚なご性格は、昭和五十五年に出版した『順天堂史』上巻に現われ、他に比肩するもののない大学史として高い評価を得ております。私事に亘りますが、先生には私も東京大学に学生として入学した時初めてお目にかかりました。その時に先生からお受けした深い感銘は終生忘れることができません。先生は多くの学生のあこがれの的でありました。先生に接する者の多くを惹きつけて放さないものがあります。それは教育者とはかくあるものだと、無言のうちに教えられた数々のことがらであります。それが時を経るに従い身にしみて判って参りました。

昨年末以来御不快の由を承り、一日も早いご回復を教職員一同お祈りしておりましたところ、突然の訃報に接しましたことは、まことに痛恨に堪えないところであります。

先生の卓越した識見と情熱をもってとつとつと語られる順天堂の歩みを、新人教育の場で、あるいは祖先祭の折等に、もう聞くことができません。先生のご逝去はご遺族にとりましてはもとより、順天堂の教職員・学生並びに卒業生一同にとりましても、その失うところは誠に大なるものがあり深い悲しみを禁じ得ません。しかし、いつまでも悲しんでばかりいるわけには参りません。幸い先生の解剖学者として、はたまた医史学の研究者としての御偉業は、多くの門下生に継承され、発展しつつあります。ま

た、多くの著書を遺され、今後も後進に学ぶ機会を与えて下さいました。ご家庭も立派なご子息、ご令嬢に恵まれ、それぞれ国の内外でご活躍中とうけたまわっております。

順天堂におきましても先生のご遺志を生かし、佐藤泰然以来受け継いで参りました旺盛な開拓精神を燃やし、不断前進更なる飛躍を期し努力することをご霊前にお約束し、ご冥福を心からお祈りいたします。

小川鼎三先生

安らかにお眠り下さい。

昭和五十九年五月十三日

学校法人順天堂

理事長　東　健彦

弔　辞

日本学士院会員小川鼎三博士のご葬儀に際し、私は博士の卓越した学問的業績と長く学界のために尽されたご努力とに対し深い尊敬と感謝の念を捧げます。

想えば昨年十一月の本院例会日にお目にかかったのが最後となってしまいました。お元気に毎月の会合にご出席くださいましたのに、このようなお別れとなり、博士の温容に再び接することができなくなりました。誠に遺憾のきわみであります。

小川博士は、脳の比較解剖研究から出発して人脳の構造と機能とを解明され、更に日本近海の歯鯨の分類、鯨類の心臓や神経の研究、また日本の医学の歴史、東洋と西洋の医学の接触点としての日本の近代医学発展の過程に関心を示され、それらについて多数の論著を発表されるなど広範な分野にわたり傑出した業績を遺されました。そのいずれの研究においても一時代を先行する意義をもった特色あるお仕事を果たされました。ここでその詳細に触れることを控えますが、ただひとつ申し述べたいのは博士が行動力ある研究者の面目を最期まで持ち続けられ、衰えをみせぬその姿勢であります。実に驚嘆すべきものがありました。

日本学士院は、昭和二十六年博士と平沢興博士との共同研究による「錐体外路系に関する研究」に日本学士院賞を贈り、更に昭和四十一年会員にお迎えしてその功績を称えました。以来博士は会員としてその深遠な学殖と豊富な体験を活かし、授賞事項の推薦、研究論文の提出、紹介等をなされるとともに第七分科選出の運営委員として本院の重要な審議に参画され、率先意見を披瀝して数々の助言を与えてくださいました。また、昭和四十八年にはロイヤル・ソサエティ・オブ・ロンドンの招請に応じ他の三名の会員と共に本院を代表して渡英、交流の実を挙げてこられました。

本院では毎月の例会当日、第一部と第二部の論文報告を同時刻に別々の会場で行っています。博士は所属の第二部での報告ばかりでなく、時には第一部報告会場にも出席し、聴講されるとともに、そこでご自身も一時間の研究報告を担当されることもありました。従って紀要への投稿も生物科学シリーズへの欧文論文に止まらず、日本文紀要へも同室研究員との共著で『解体新書』出版以前の西洋医学の受容」と題する論稿を掲載され、幅広い博士

の活動を本院発刊雑誌のうえにも示されました。その話題の展開と省察は読者に大きな示唆を与えました。

博士は、平素から穏かで飾るところのない、謙虚なお心を持たれ同僚会員から敬慕されておられました。第七分科では長く黒川委員長を援け、会の運営進行に尽力くださいました。その心の通った適切なご配慮とご援助に一同感謝いたしておりました。

解剖学と神経学と医史学と広い学問分野に通じておられた博士のご存在は本院にとって重要なものがありました。かけがえのない会員を失い寂寥の感一入深いものがあります。また、日本の学界にとりましても惜しみてもあまりある。お方であったと存じます。博士の許から巣立った人々がその衣鉢をつぎ、博士の実証的で質実な学風を守って歩んでおられますことを知り心強く思いますとともに、それが亡き博士の霊をお慰めする何よりのはなむけとなるものと信じます。

ここに、博士の在りし日の面影を追想しつつ深甚の弔意を表します。

昭和五十九年五月十三日

日本学士院長　有澤　廣巳

弔　辞

小川君と声をかけると、「おお」とか「やあ」とか機嫌よく答えてくれる小川君はもういません。淋しいです。

私が君を知ったのは大正八年九月（一九一九）二人が京都の第三高等学校へ入ったときからでした。ただし君は理科甲類、私は乙類でしたから、そのころはまだ互いに顔見知りという程度でした。当時君は植物学を志していたということでしたが、のち医学をめざして、大正十一年四月（一九二二）二人とも東京大学医学部に入りました。二人はこの時点から決定的に親しくなりました。なにしろオガワとオガタでは、なにかにつけて一緒でした。机をならべて学ぶと申しますが、在学中の二人はそうではありませんでした。現に講堂では小川君はいかにも典型的な優等生で最前列に席を占め、まじめにノートをとっていましたが、私は原則として遙か後方の最上段のあたりにいて、気楽にやっていました。ただし実習の時はそうではありませんでした。私は実習で体験する技術や現象は、今身につけておかないと、あとでその機会がないかもしれず、いざ必要という時にそれを役立てることができないかも知れないと考えたからでした。私の場合そうしておいてよかったとおもいました。そのようなわけで、実習は、小川君と私とは文字通り肩を接してやったものでした。私はどちらかといえば手先の器用な方でしたから、小川君のたどたどしい手付を見かねて、ついつい手を貸したこともありました。失敬なことをしたと後悔しています。

二人は大正十五年三月（一九二六）卒業し、いずれも基礎医学の学究として、めいめい別の道を歩み出しました。小川君は脳の解剖学を志し、思うところあってみずから母校を離れて東北大学解剖学教室に入り、布施現之助先生の指導を受けました。私はその強い信念に敬服しました。私は母校で病理学の基礎を学び、それから血清学に進みました。これは恩師三田定則先生の御指示に

よるものでした。

小川君はやがて母校に帰り、昭和十九年十月（一九四四）教授になりました。私は道なき道をふみわけて、ながい助教授の講座担任の時期を経て、昭和二十四年八月（一九四九）教授になりました。それより前から講座担任として教授会に出席、いつも小川君と文字通り席をならべていました。

二人は昭和三十七年三月（一九六二）同時に定年退職しました。

このころのわれわれ二人のことをある人が書いたもののなかに、二人がよく街を一緒に歩いているのを見かけるが、あんなに性格がちがい活動範囲もちがうのに、よくけんかをしないものだという意味のことを述べているのに対して、小川君はこう書いています。

私どもからいえば極めて自然であって、専攻科目（範囲）が異なり性格がちがってもこれ以上の良い友はなかなか得られないものである。

まことにわが意を得たものです。申すまでもなく専攻領域がちがうということは、他のものが十分に理解できないものを持っているということであって、それでなお二人は親友であり得ました。そして互いに信じ、尊敬しあっていました。

ところが小川君と私の場合、幸なことに、大学をはなれてから、いや大学にいたときからも、共通の関心領域にひたることができました。小川君は私どもの誘いもあって、私が前から手がけていた医史学、蘭学史の領域に入りこんできました。そして君の持前の重厚で意欲的、本格的な態度でつぎつぎと見事な研究を発表し、斯道一流の貴重な存在になりました。そして早くも昭和三十七年退官前に推されて日本医史学会の理事長になりました。ここで二人はそれまでとは別の共有の関心領域を持つようになり、かくて二人は同学の友となり、小川君が亡くなるまで、小川君とのかかわりなしでは考えられないものになっていました。

もとより小川君との永久の別れは悲しいことですが、私は小川君の私に対する友情に感謝せずにいられません。小川君も私のことをそう思っていてくれたことと信じます。

小川君、どうかやすらかにおねむりください。さようなら。

昭和五十九年五月十三日

緒方　富雄

弔　辞

小川鼎三先生、私どもの終始敬愛してやまなかった先生、大学を別々にしながらも卒業直後から共に解剖学、特に神経解剖学を専攻し最期まで親しくして戴いた先生、今ここであなたの前で弔辞を述べねばならぬとは何たる悲しいことでありましょう。

私があなたの恩師、布施現之助先生から親しくあなたに対するおほめの言葉を聞いたのは、一九二八年スイスのチュリッヒ大学脳解剖研究室であり、厳しい布施現之助先生も既にその頃から高くあなたの偉才を認め、その将来に大きな希望を持っておられたのであります。

幸いに私もその後布施先生の恩寵をうけることになり、じき弟

子ではありませんが、高い立場から御指導をうけて参りました。こう考えると、くしくも我々は広い意味では共に布施先生の兄弟弟子になるのであり、いつか話しあって世の中は広いようで狭いものだなどと驚いたことがあります。

また日本学士院賞を戴いたのも共に昭和二十六年で「錐体外路に関する研究」としてであり、あなたは錐体外路系のうちでも主として脳幹脊髄系、なかんづく赤核を中心とした錐体外路の研究に当られ、私は主として大脳皮質系の錐体外路の研究をしていたのであります。互いに独立して錐体外路の研究をしながら、同時に日本学士院賞をうけるなどということも誠に不思議な因縁だと思います。

同じ方向の研究なので、私どもは常に互いに連絡したり、相談したりしておりましたが、あなたはいつも公明正大で胸襟を開いてお話し下され、ただの一度も不快を感じたようなことはありませんでした。あなたはいつも言うべきことは堂々と言われたが、そこに少しの嫌味も、暗さもなく、また正しい批判に対しては、あなたは実に素直で、改むべきは莞爾として改められました。

あなたの研究範囲は誠に広く、あなたには更にすぐれた鯨の研究とか、いわゆるヒマラヤの「雪男」の研究とか、先駆者的の医史学の研究などいろいろありますが、ここでは触れません。

小川鼎三先生、あなたは学者として、人間として誠に至れる大人でありました。多くを言わないが、実に誠実無比で、常に物の本質をつかんで事に当られ、周囲からはいつも敬愛の的でありました。あなたこそは実に和して同ぜざる人で、常に堂々と正しき道を歩かれました。

厳にしてしかも固からず、厳しさの後には何者をもとかす深い愛情を持っておられ、あなたの人間としての美しさと偉大さには我々は等しくほれぼれとしておりました。

小川鼎三先生！　何れそのうちに私も参りますが、どうぞその時は、天国の先輩としてよろしくその道案内をお願い申上げます。

心から御冥福ととこしなえのお安らぎをお祈りして、私の弔辞といたします。

昭和五十九年五月十三日

平澤　興

弔　辞

東京大学医学部解剖学教室一同を代表してこの弔辞を小川鼎三先生の御霊前に捧げます。

小川先生は優に二人分の人生を而も十二分に全うされました。解剖学者として四十年、医史学者として二十年、そして脳の解剖学では学士院賞をお受けになり、のち学士院会員となられるような業績を挙げられました。東大退官後順天堂大学は医史学講座を新設して先生を迎えられました。昨年先生の医史学開講二十周年記念講演会に出席して先生が全々異った専門分野を二つ乍ら完成なさったことに改めて畏敬の念をおぼえたものであります。

昭和二十年終戦直後の九月私ども故細川宏教授と現慈恵医大教授の吉村不二夫君の三人はそれぞれ陸海軍の病院より復員し揃って小川先生の門を叩いたのであります。私どものあとにはその後

も解剖学志望の若手が続き、ついに東大解剖始まって以来の活発な研究室となりました。今日先生の孫弟子曽孫弟子を含む小川山脈の裾野はなおも拡がりつつあります。

私は先生の講義を受けてから四十三年今日まで一度も叱られたことがありませんでした。研究の指図をされたことも催促を受けたこともありませんでした。しかし明け暮れ御一緒し先生のお仕事ぶりを拝見し二十年の間、週六日間先生ともども持参の弁当を食べ乍らの雑談それらの中にすべてが毛孔から滲み込んだと確信します。

先生は何事も本気でなさいました。そうして出来たものはみな本物でありました。鯨の脳の研究からその鯨の種を確かめるために分類学を、そしてついに新種を発見されました。オガワコマッコウの名が与えられているのがそれであります。

医学の歴史を私どもは先生の趣味かと思っておりました。ところが退官後順天堂に移られてからは医史学に専念され多くの論文を発表なさいましたが、解剖学会にはついに一度も顔を出されなかった程の鮮かな転身ぶりでありました。

先生は全くよき時代を大学教授らしい教授として過ごされました。また御家族にも恵まれておいでになりました。

ミミズ博士として有名な奥様は長い教授生活を退かれてお元気です。御長男は三菱商事の幹部としてアメリカで活躍されています。二人のお嬢様はそれぞれ大使夫人と医学部教授夫人、そして三人ともよい御家庭をおもちです。

ガンは先生の命を奪いましたが全く転移なく最期までお痛みにならなかったと伺っています。

皆から尊敬され誰からも憎まれず先生は世にも稀な恵まれた方でありました。心から御冥福をお祈りいたします。

昭和五十九年五月十三日

中井準之助

弔　辞

日本医史学会理事長としてその慈愛深い御人柄と高邁な御見識を以て会員一同のひとしくお慕い申し上げておりました小川鼎三先生は去る四月二十九日遂に帰らぬ旅路におつきになられました。まことに悲しみてもあまりあることでございます。

先生は東京大学教授として、医学部解剖学講座を御担当されておられました頃から、夙に医史学に興味をおもちになられ、その講筵に列することの許されました私どもに、麻田剛立の解剖学上の業績について御紹介され、あわせて学問のあり方について熱情をこめてお話し下さいました。昭和二十六年のことですから先生は五十歳で、同年には「赤核の研究」で日本学士院賞を受賞され、解剖学者として最も円熟をきわめられた頃のことであったと存じます。先生は昭和三十五年五月に第六代日本医史学会理事長故内山孝一教授のあとを承けて第七回理事長に御就任され、以後約四半世紀にわたって困難の多かった時代に文字通り身を挺して学会の運営にあたられ、今日の隆昌に導かれたのでありました。そして昭和三十七年三月東京大学を御退官になられ、ただちに同年四月に順天堂大学教授に御就任され、同大学医学部に医史学研

究室を創設されたのでございます。私は先生の後継者であられます現順天堂大学助教授酒井シヅ博士とあい前後して昭和四十二年四月に先生の門下に加えていただきまして以来酒井博士同様に親しく教室に出入りすることを許されて今日に至りました。

先生の医史学上の大きな業績についてはいずれまとめられることと存じますのでここには申しません。ただ一つ申し上げたいのは先生を中心として、昭和五十一年に発足した国際比較医学史シンポジウムのことであります。このシンポジウムは先生と三高時代以来の御親友であられる谷口豊三郎氏の御好意により谷口財団の医史学部門として行われているもので、年一回、外人五人、日本人五人という小人数で一週間にわたり起居を共にして実質討議をするというもので、医史学研究の国際交流に大きな足跡をのこし、外国からも注目を集めるに至ったものであります。この会は小川先生が組織され先生御自身も常に大変楽しみにされていたようにお見受けいたしました。

先生亡きあとの医史学会の行く手はきびしいものと思われます。先生のお築きになられたよい伝統を守り、さらに発展するべく会員一同結束して努力していくつもりでございますので、どうか御生前と同様に本学会の将来を御見守り下さい。

謹んで御冥福をお祈りいたします。

昭和五十九年五月十三日

日本医史学会
理事長代行　大塚　恭男

弔　辞

日本解剖学会を代表して、謹んで日本学士院会員、東京大学名誉教授、元日本解剖学会理事長故小川鼎三先生のご霊前に尽くせぬ哀悼の意を表します。

かねて入院加療中ともれ伺い、ひたすら奇跡を念じておりましたが、その願いもむなしく去る四月二十九日ついに不帰の客となられました。まさに暗夜に灯火を失った思いで、追慕、寂寥の情耐え難いものがあります。

顧みますと、先生は大正十五年東京帝国大学医学部をご卒業と共に東北帝国大学助手、ついで同大学助教授、さらに東京帝国大学助教授、そして昭和十九年同大学教授にそれぞれ就任され、昭和三十七年定年退職されるまで実に四十年間ひたすら解剖学者の道を歩んでこられました。この間の鯨の解剖、脳解剖および医史学に関するご業績は世人のあまねく知るところでありますが、特に脳解剖領域の「赤核に関する研究」で昭和二十六年日本学士院賞を受賞されております。

また、先生は教育者および指導者としても偉大な足跡を残され、学生および後進門下の育成に精励されたことはもちろん昭和二十一年から十二年間の長きにわたり日本解剖学会理事長として学会の発展のために献身されました。

先生のお人柄は誠に気高く、しかも慈父の如く、先生に接する者は誰一人として先生を敬い、お慕い申し上げない者はございません。

ここに先生のご勲業をとこしえに讃えお別れの言葉と至しま

す。

昭和五十九年五月十三日

日本解剖学会
理事長　大谷　克己

弔　辞

東京大学名誉教授小川鼎三先生の御逝去をここにお悼み申しあげます。

先生は大正十五年東京帝国大学医学部を御卒業になり直ちに仙台に赴かれ本学の先輩であられる布施現之助先生のもとで神経解剖学御専攻の道を歩み始められました。昭和十一年東京帝国大学医学部における脳研究施設の開設とともに先生は本学講師に就任されて哺乳動物脳の赤核についての実験的研究を鋭意推進されました。この御研究の成果に対し昭和二十六年に日本学士院賞が授与されました。

先生は昭和十四年東京帝国大学助教授、昭和十九年東京大学教授となられましたが昭和三十七年に停年御退官となられるまでの二十六年間の永きにわたり東京大学医学部で研究と教育に尽くされたことになります。

先生はさらに昭和二十一年から三十三年まで日本解剖学会理事長を務められましたほか昭和三十五年より日本医史学会理事長、昭和三十七年より日本学術会議脳研究連絡委員長、昭和四十一年より日本学士院会員ならびに文部省大学設置審議会専門委員、昭和四十四年より厚生省臓器移植に関する懇談会委員などとして学会ならびに社会に広く貢献されました。

先生は性格が豪放で決断力に富む方であられましたが、一方では非常に細かい点にもよく気を配られる優しさを兼ね備えて居られました。また、先輩・同僚・後輩のいずれに対しても常に誠意を以て対応され、先生を知る者はすべて先生に対して厚い信頼感を抱いておりました。

今、この偉大な師表を失いましたことは、ただ東京大学医学部のみならず日本の医学のためにまことに惜しみても余りある悲しい出来事であります。

ここに先生の御偉業をしのび心から御冥福をお祈り申しあげ弔辞といたします。

昭和五十九年五月十三日

東京大学医学部長
三島　濟一

弔　辞

小川先生は一九三六年三月、東京大学医学部附属脳研究室が発足すると同時に第一部の主任に就任され、赤核の研究を進められた。先生は当時、東北帝国大学助教授、東京帝国大学講師の任にあられたが、加へて草創期の脳研を兼務するといふ激職を果されたのである。先生は四四年以後、東大解剖学教室を主宰されるとともに、内村祐之先生を継いで五八年に脳研の第三代施設長に就任され、六二年のご退官までその任にあられた。小川先生は脳研出発の第一日から渝ることなく、脳研の発展につくして下さった

のである。小川先生のあと時實利彦先生が施設長を継がれた。小川先生、時實先生のご努力が実って、文部省の特定研究としてはじめて脳がとりあげられたが、その後九年にもわたってこの特定研究が継続したのは「赤核の研究には十年はかかった」といふ小川先生の一言が、当事者の心を動かしたためと伺ってゐる。この九年間はそれまで各方面に散らばってゐた脳研究者を結集し、日本の神経科学界を育成した点でまことに画期的な時期であった。私事にわたって恐縮であるが、私は一九五二年四月以後インターンの一年間を脳研の解剖学部門で過させていただき、脳の連続切片を写生してゐた。当時助教授でをられた萬年甫氏と小川先生との会話を傍らで拝聴し、判らぬながらも楽しく、多くの刺激を受けた。

私は当時の記録として先生の名著「脳の解剖学」とスケッチ帖二冊を大切に保存してゐる。私は数人の友人とともに確か芦ノ湖のほとりの樹林で、小川先生の茸狩にお供させていただいたことがある。時を忘れて茸に没入される先生の姿は、かねがね先輩から教えられていた通りで、私はいちはやく先生から落伍してしまった。小川先生は第二のお仕事として、医史学の研究に情熱を注がれた。大分県のご生家で襖紙をはがして古文書を探してをられるなどの話を伝へ聞くにつけ、一本の茸をあきずに眺めてをられる先生の姿を憶ひ浮べた。先生は含蓄に富む多くの文章を遺されたが、昨年刊行された「医学用語の起り」も、先生でなければ考へられない探究と思索の結晶であると思ふ。

ここ二、三年来私は朝の通勤時間帯に、御茶ノ水から順天堂大学へ向う道筋で、人びとの流れに後れて、前屈みに、いくぶんたゆたふかのやうに歩まれる先生にお会ひし、それが数度に及んで萬年さんや金光晟さんに懸念を伝へた。しかし小川先生は、満員電車での通勤を一向に止められる気配はなかった。私は先生の気魄に打たれながらも、憂ひを覚えずにはをられなかった。先生の御業績とお人柄を偲び謹んで御冥福をお祈りする次第である（一九八四年五月五日）。

東京大学医学部脳研究施設長
黒川　正則

弔　辞

東京都神経科学総合研究所を代表し、小川鼎三先生の御葬儀にのぞみ一言お別れの辞を申しあげます。

東京都神経科学総合研究所の初代所長として、その困難な草創期の四年間にわたり研究所発展の基盤を不動のものとされた小川先生が永眠され、私ども後進一同、心に深く先生の御他界をお悼みするとともに、私どもの失いますところの極めて大きいことを悲しむものであります。

改めて申しあげるまでもなく、先生は我国における解剖学の第一人者として、また医史学研究の権威として国際的にも高く評価され、現代医学の目覚ましい発展に貢献された御功績は余りにも著名であります。先生を失いましたことはひとり研究所のみならず、広く学界の大きな損失でありまして、心から痛惜に耐えない次第であります。

私は、東大医学部の学生として初めて先生の御講義を拝聴してから約三十七年を経過した後、先生の後をうけまして東京都神経科学総合研究所の所長を務めるというめぐり合わせになりました。また、先生は、九州の杵築という小さな城下町で御成長になり、解剖学者、ついで医史学者としての道を歩まれましたが、私もやはり九州の大村という小城下町で成人し、生理学の研究に自分の生涯をかけて参りました。私は先生に対し深い尊敬の念にくわえ、先生と共通しているという親近感を抱いてこの数年間を過ごしてまいりました。先生が研究所の所長を御退任になりましてからは、研究所参与としての先生に折りにふれ研究所の情況を御報告申しあげることが私の楽しみでありました。また先生も、お忙しい御研究の中、御高齢をおして参与会などには欠かさずにお顔を見せられ、研究所の運営に貴重な御指導を賜りました。

このたび、先生は率然として幽冥境を異にする世界に旅立たれました。先生を研究所の精神的支柱としておりました私どもにとりまして、先生とお別れすることは大変に悲しく、淋しいことでございます。

しかしながら、先生の偉大な御業績と後進に遺されました測りしれない御薫陶は永遠に不滅であり、私ども研究所はもとより広く学会の発展にとって無限の力となることは疑う余地のないところであります。

折しも、研究所の南庭の一角には、先生が所長を退任されます際に、記念として御自身で御自宅のお庭から移植されましたライラックが、遅しい若木に成長し初夏の陽光の下、可憐な花を一杯につけ、ふくよかな香りであたりを充たし、あたかも後進の私どもを温かく見守り励ますかのようであります。

ここに私は、東京都神経科学総合研究所を代表し、先生の御永眠をふかくお悼みし、その偉大なる御業績に対し心からの畏敬と感謝の念を捧げ、謹んで弔詞を申しあげるものであります。

昭和五十九年五月十三日

（財）東京都神経科学総合研究所
所長　佐藤　昌康

弔　辞

謹んで小川鼎三先生の御霊前に、鯨の研究者として弔辞を捧げます。

先生の御専門は医学特に解剖学でありますが、周知の通り、先生は偉大な鯨学者でもあり、本邦の歯鯨分類のいわば草分けであったのであります。

先生が鯨の研究をお始めになった直接の動機は、仙台の東北大学医学部で脳を研究中、これと比較する意味でイルカの脳を研究することとなり、昭和五年頃仙台の魚市場にイルカの頭を注文したところ、持参したイルカの頭二個は、明らかに別種であるにも拘らず、両者共にマイルカであると告げられた時に端を発しております。

当時の日本の鯨学は誠に幼稚な段階にあり、イルカの脳を研究するためには、先づ鯨の分類を始めなければならなかったのであります。

そこで先生は広く日本を行脚され、各地から標本を集め、研究を進められ、その成果は「植物及動物」（養賢堂）に一九三六年から一九三七年にかけて「本邦の歯鯨に関する研究」と題して九回に分けて連載されました。そして日本最初の「日本近海の歯鯨類目録」を作成されたのであります。

戦後の日本は連合軍総司令部の許可を得て、一九四六年には小笠原近海で、引き続いて南氷洋でも捕鯨を行なうこととなりました。これを機会に先生は歯鯨だけでなくヒゲ鯨の研究も開始されたのであります。

当時財団法人中部研究所というものがありました。先生は当時東京大学医学部教授でありましたが、この研究所の理事長丸山勉博士に協力されて一九四六年に、この研究所を改組して、財団法人鯨類研究所を設立し鯨の生物学的研究を大いに推進させることとなったのであります。

財団法人鯨類研究所は、一九六〇年に至ってある事情のため、捕鯨協会と合併し、財団法人日本捕鯨協会鯨類研究所となりましたが、先生はこの時まで鯨類研究所の理事として研究業務の発展に努力されました。

先生は御自身でも鯨の研究を行なはれ大きな業績を残されましたが、ここに大書すべきことは、先生のお弟子さんである、東大医学部解剖学教室の若い優秀な人達を南氷洋で操業した捕鯨母船第一日新丸船団に毎年乗船させて、現場における鯨の観察と標本の採集を行なはせたことであります。

先生御自身も乗船を希望されましたが、残念ながらこれは果せませんでした。

このようにして得られた研究成果は、鯨類研究所の英文報告に掲載され、世界の鯨学者と研究機関に配布されました。

この報告は現在も引き続いて刊行されており、本年四月には第三十五号を発行致しました。最近では外国からの投稿が増加しております。

最後に、先生はかつてイルカ胎児の後あしに関する論文を発表されましたが、最近ロンドンの大英博物館から、この論文に掲載されている写真を、同博物館に展示したいとの申し込みがありました。

私は先生のお弟子さんにお願いして、この写真を作成して早速先方に送りました。折り返し鄭重なお礼状が届きましたが、この写真は、鯨の研究では世界的に著名な、大英博物館の一室に、先生のお名前と共に長く展示されることと思います。このことはまだ私自身から先生に御報告してありませんでしたので、ここに先生の御霊前に御報告する次第であります。

和昭五十九年五月十三日

財団法人日本捕鯨協会
鯨類研究所長　大村　秀雄

弔　辞

本日故小川鼎三先生の順天堂大学並びに日本医史学会の合同葬が執り行われるにあたり順天堂医学会を代表して謹んで御霊前に申し上げます。

先生は医史学研究室の教授としてご就任の翌年、昭和三十八年秋より順天堂医学会評議員並びに順天堂医学雑誌の編集責任者となられ昭和三十九年三月発行の第六三四号より故坂本嶋嶺先生のあとを引継がれ編集委員長及び当会の運営委員として今日まで二十年間に亘りご尽力を賜りました。

順天堂医学会機関誌「順天堂医学」の前身和紙和とじ木版の「順天堂医事雑誌」が初めて世に出たのは今から一〇九年の昔、明治八年十月で、これは日本における医学定期刊行物として先鞭をつけたものであります。

爾来順天堂の光輝ある歴史と共に連綿と続いてまいりましたが、昭和三十六年に至り、当時の旧学位論文の投稿原稿増加に伴い、大学機関誌としての在り方が問われ廃刊との案もあがりました。

しかし先生は、研究者は己れの研究業績を公表する義務があり、他の批判を受けて何が重要な問題点なのかを理解し、将来の進むべき方向を探求しなくてはならない、というお考えと、順天堂の先人達が日本の医学の水準を引上げるべくこの雑誌にその願いを託し、全職員が一丸となって筆をとり盛りたて順天堂医院とともに歩み続けてきた「順天堂医学雑誌」をさらに存続発展させなければならないとの決意をされたのであります。

編集委員長としての先生は昭和三十九年四月に誌名を「順天堂医学」と改め原著論文を中心とする編集方針を大きく変え、順天堂医学会学術集会の毎回のテーマを特集して日進月歩の医学の現状を正確に紹介する「総説誌」とするという大胆な改革を実行されました。

爾来昭和五十九年三月発行の七一三号まで七九号に亘り編集委員長として驚嘆すべき情熱をもって主宰された「順天堂医学」はユニークな機関誌として異彩を放ち他の追随を許さぬものとして高い評価を得るに至りました。これは偏に先生の卓越した識見とこの雑誌に対する愛着の念によるものであり、またこれを通して日本の医学振興に尽すという先生の熱情によるものと全く敬服いたすところであります。

先生のご逝去はご遺族にとりましてはもとより、順天堂医学会、我が国医学会にとりましても、その失うところは誠に大なるものがあり深い悲しみを禁じ得ません。私ども後輩は先生のご熱意を正しく受けとめ「順天堂医学」の存在価値を高めいよいよユニークな学術雑誌としこの雑誌の栄誉ある永い歴史を守り続けてゆくことをご霊前にお約束し、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

昭和五十九年五月十三日

順天堂医学会
会長　関根　隆光

弔　辞

去る四月二十九日、突如、小川先生の訃報に接し、私たちにとって余りにも偉大な医学者としての先生の急逝を、心から悼んでやみませんでした。

先生と順天堂とのご縁は、昭和二十二年四月に、順天堂医学専門学校の講師として、解剖学をお教えいただいた時から始まりま

す。当時すでに脳解剖の権威として、名声を馳せておられた先生の講義を受けることが出来ましたのは、順天堂に学ぶ医学生として望外の幸せでした。淡々とお話しになる言葉の端々には、先生の深い智識の造詣と、幅広い人徳が滲み出て、その名講義は今でも私たちの脳裡に深く刻まれて忘れることがありません。

更に先生と順天堂とを一層深い絆で結んだのは、順天堂大学理事長有山登先生の、医史学研究室を創設する、という構想のもとに、当時すでに日本医史学会理事長であられた小川先生が昭和三十七年四月、教授として就任されたことでした。

以後、研究室は先生のお力によって発展の一途を辿り、国内の医史学研究の中心的存在として注目されるようになりました。順天堂に関するものだけでも、佐藤達次郎略伝、佐藤進先生略伝、佐藤泰然伝などが次々と出版されました。そして昭和五十五年、その集大成として念願の「順天堂史、上巻」が刊行され、私たち同窓生へも有山先生から配布していただきました。

その厚い重厚な本を繙くと、資料の厖大さ、写真、手紙、年譜などの詳細、精密なことに大きな感銘を受けたのでした。今でも常に座右に置き、暇ある毎に伝統ある順天堂の歴史を顧み、それを編纂された小川先生のご遺徳に接し得る幸せを感じております。

先生は又、昭和三十九年四月から、順天堂医学会の評議員になられ、興味深いテーマを掲げて、順天堂医学会主催の講演会を積極的にご企画になりました。一方、従来からの順天堂医学雑誌を面目も新たに、各号を臨床に関係ある特集記事でまとめられ、格調高く親しみ易い「順天堂医学」を編集され、私たち同窓生の卒後教育について二十年間に亘りご尽力をいただきました。

解剖学、医史学、順天堂医学会、また医学会誌の編集と、数々のお仕事の発展に尽された先生のご逝去は、まことに惜しみても余りあるものでした。また常にご闊達で爽やかな雰囲気を周りの人々にお与え下さった先生のご人格を思うとご家族の皆様のお悲しみもいかばかりかと推察され、心よりお悔み申しあげます。

元生の遺された偉大なご業績は永遠に讃えられ、そして私たち同窓生の心には、先生のお話しの一節一節が常に活き活きと生き続け、医師としての志を貫け、と励ましておられます。

小川鼎三先生、どうぞ安らかにご永眠下さい。ここに先生のご遺徳を讃えますと共に、先生のみ霊の安らかならんことを念じてやみません。

昭和五十九年五月十三日

順天堂大学医学部
同窓会会長　平野　重明